

町の文化財あれこれ 其の六十四

湘南馬車・軽便鉄道の歴史(七)

明治から昭和初期に秦野、井ノ口、二宮まで「湘南馬車鉄道・軽便鉄道」が走っていたことをお伝えしていますが、その沿線にある菘笠神社の境内に傾いて、ひび割れし、今にも崩れ落ちそうな石碑が鉄パイプで支えられ立っているのをご存じでしょうか。

この石碑は『日露戦争の戦捷記念碑』で明治四十年(一九〇七)に伊藤博文侯爵が揮毫されたものです。この神社に、なぜこのような石碑があるのか。その歴史を紐解いて参ります。

宝永火山の爆発で不毛の地となったこの地域で煙草や落花生生産や、木材、絹綿織物の産業が盛んになり、その物資の輸送は全国的にも大事なことでありました。この時期に国家的、政治的な影響力があった明治時代の政治家が伊藤博文侯ということになりましたが、偶然で無かったことが分かります。



伊藤博文侯爵

伊藤博文侯は、周防国(山口県)出身、天保十二年(一八四一)長州の下級武士の生まれです。幕末から明治維新の若いころより、英国の貨幣制度・産業・文化・軍事を学び取り、日本の開国、明治政府の一員として、貨幣制、鉄道事業、内閣制度の創設や大日本帝国憲法の制定に尽力し明治十八年(一八八五)初代の内閣総理大臣に四十四歳で就任し、第五代、第七代、第十代と、四回も務めています。日清・日露戦争を経て、明治三十八年(一九〇五)初代韓国統監となり、朝鮮半島の政治体制を整えようとした。明治四十二年(一九〇九)中国奉天(ハルビン)駅で朝鮮の独立運動家に暗殺されました。幕末から明治と激動の時代を全力で走り抜いた元勳は六十九年の生涯を終えました。

明治二十九年(一八九六)小田原から大磯の滄浪閣に引っ越し、本宅にすると、明治三十一年(一八九八)葉煙草を専売制にし、明治三十七年(一九〇

四)秦野の煙草工場を官営の製造工場とした訳です。その二年前に開設された二宮駅への輸送計画を推進、明治三十九年(一九〇六)湘南馬車鉄道を開設するため、有能な知識人、福沢諭吉(慶應義塾創設者)に託しました。その当時、明治二十年(一八八七)に国府津まで東海道線が延伸され、明治二十二年(一八八九)に御殿場線經由で東海道線が全通すると、その前年、小田原から箱根湯本の小田原馬車鉄道、後の電気鉄道、箱根登山鉄道や、明治二十八年(一八九五)湯河原・熱海の温泉地への人車鉄道・軽便鉄道、後の熱海線などの鉄道開設に、神奈川県西部の交通網が大大きな変革を遂げた時期でもありました。

この働きかけに呼応したように、伊藤侯爵は、馬車鉄道に乗り、秦野の専売公社に通い続けました。その地域の自由民権運動活動家、事業経営者、経済知識人、地主・農民指導者達がその神奈川県西部の交通近代化を促進する事業に協力した賜物です。

その沿線の菘笠神社の境内に「日露戦争戦捷記念碑」を残されたのは、地元で軽便の発起人、株主の有志達の要望によるものと思われる。秦野の専売公社への馬車鉄道の道中「これからは馬車の時代では無い!蒸気を使った軽便を作らねば」と、同志達に増資を呼びかけ、五台の蒸気機関車を導入する道を開いてくれた役割を呼んでくれた明治の政治家がこの地に大事な足跡を残しました。伊藤侯爵は大正二年(一九一三)、その「湘南軽便鉄道」の開通を見る事無く、ハルビンで暗殺された訳です。亡くなる二年前に記された伊藤侯の歴史を、この石碑を見学して辿っていただきたいと思えます。



菘笠神社の記念石碑

(文化財保護委員 尾上仁郎)